

## 経済学博士柚木 学君の「近世海運史の研究」に対する

## 授賞審査要旨

近世海運史の研究は戦前の古田良一・住田正一両氏らの業績以来あまり進展を見なかったが、著者柚木学君は、戦後における商品流通史や造船技術史研究の成果をも吸収して、この未開拓の領域に敢て挑戦したところに本書の劃期的な特色がある。戦前の研究は、全国的な海運航路の究明や法制史的な海損規定の解説に主力がおかれ、経済史的、あるいは経営史的研究とはいい得なかったが、戦後にはさまざまな局面において研究の深化があらわれて来た。著者はこうした研究成果の蓄積を体系づけ、その上に新発掘史料の博搜につとめて、本書をなしたのである。

まず序章では、これまでの研究史を総ざらいにして、その中から新たな問題点を把えようとしている。

第一編第一章では米・酒・醬油・油・木綿・絹織物・砂糖・木材等の主要商品の流通について説明し、とりわけ多くの家わけ文書、酒造組合文書を縦横に駆使し、樽廻船運営の実態と運賃積の廻船経営を検討している。

第二章では新史料を駆使して菱垣廻船・樽廻船に内在する複雑な諸相が精緻に掘りおこされている。そして従来の単なる制度史的研究をこえて、商品流通をめぐる荷主・問屋・廻船問屋の関連において卓越した見解を示している。

第二編では菱垣廻船と樽廻船の運賃積と北前船の買積みの業態を取り上げ、廻船経営におけるこの点の相違を対比している。なかんずく廻船経営における共同出資の形態としての廻船加入の問題には丹念なる論述をなしている。菱

垣廻船が江戸十組問屋に掌握されていたように樽廻船は荷主たる上方酒造仲間によってにぎられていた。下り酒の江戸積酒造地として灘五郷が近世後期に発展していく背景には、このように輸送部門を自らの資本のもとに従属せしめていたのである。この廻船加入形態に関し、菱垣廻船では江戸十組問屋所属の各組の問屋仲間の「分割加入金」の形態が支配的であったのに対し、樽廻船では酒造仲間の加入形態をとらず、むしろ各個の荷主||酒造家の単独加入の形態をとっていた点、および加入者が菱垣廻船ではかなり多いのに対し樽廻船の場合は極めて少なかった所に相違があった。菱垣廻船の場合は資本の調達に重点がおかれていたのに対し、樽廻船は経営、とくに手酒の円滑な輸送に主力がおかれていた。

第三編では瀬戸内海運の廻船業をとりあげ、御城米輸送を主とする廻米に活躍した塩飽廻船と淡路由良港が海運上で果たした役割、そして讃州直島の廻船業をとりあげている。享保期以後塩飽廻船は没落し、貢租米輸送体系も農民的商生産の発展と、それに結びついた在方における商品流通の進展で、漸次沿岸浦々での小廻りの活躍がみられるようになり、こうした情勢をうけて各地に廻船持層が叢生し、港町商人の廻船は次第に遠距離間の運航にも進出するに至る。

第四編ではまず日本海海運の成立を明らかにし、従来は北前船といえ、北陸の北前船に焦点を合わせて限定して考えて来たが、これらについても再検討すると共に、更に視野を拡大して、同様に北海道交易にも従事して来た但馬——丹後の北前船主の活躍にも光を当てている。但馬の瀬戸・竹野・浜安木・諸寄の地方に化政期より胎動を示し、日本海沿岸取引では百石積以下のものから、漸次幕末になると大型化し、それと共に雇船頭（沖船頭）から直乗船頭へと上昇し、自立化していく過程を明らかにしている。また雲州鷺浦の「船御改控帳」を通じて、近世後期から明治

大正期に至る船問屋の機能や北前船の動向を探っている。

補論として「北前船の系譜」が収められているが、これでは北前船の定義に関連して、先行諸家の説を適切に批判しつつ、著者独自の見解を開陳し、俗にいう「船主船持、船頭金持」なる言葉に関しても、視野の広い考証をなし、更に技術史的観点からも、随所に新見解を述べている。「和漢船用集」にて説明されて来た「北国廻船」「北国船」が北前船であると理解されて来たが、この北国船は近世初期に北陸地方で活躍した羽ヶ瀬（はがせ・はがいそ）船と同様な北国造りのローカルな特定の船型であったとし、弁才型として近世中期以後、西廻り航路にて活躍した北前船はこれと峻別して考えねばならぬとする。のちの北前船は弁才造りの廻船で、構造上は菱垣廻船・樽廻船とも同一の船型であったとし、商品輸送量の増大で、弁才型の北前船は次第に大型化し、買積船にふさわしい船腹の幅広い「どんぐり」型の荷船に改造されていった。そして北前船も明治維新後は和船から蒸気船にかわって行った。

以上本書は幕藩体制下における近世廻船業・商品輸送の動態的分析を意図したもので、上方——江戸間、瀬戸内、日本海の三つの主要航路に展開された海運の実態を、新発掘史料を豊富に駆使して、菱垣廻船・樽廻船・北前船・塩飽船を中心に商品取引、問屋との関係、乗組員構成、輸送状況と経営動態を総合的に検討したものである。何故に菱垣廻船と樽廻船とが買積船の形態をとり、北前船が買積船の形態をとっていたかを、幕藩体制における経済発展の地域性や市場構造の視角から追求し、運賃積の特色である廻船加入の問題も丹念に各種のケースによって論じている。

海運業における共同企業の発展の問題については経営史学上からいって新たな分野を開拓したものと見える。しかも随所に近代・現代海運体系の成立に至る過程にまで説き及んでいて、首尾一貫した出色の研究といえる。